

感性を育む保育者の関わり

—エピソード記述を用いた保育実践からの検討—

永野 颯一郎・木谷 岐子

抄録：本研究では、感性を育む保育者の関わりを検討することを目的とした。これを明らかにするために、鯨岡（2017）による「エピソード記述」という研究方法を用いた。検討の結果、感性を育む保育者の関わりとは、まず、こどもが何に興味を示し、何を楽しんでいるのかを捉えることであると検討された。これにより、保育者が抱く「コンセプト」からずれるこどもの姿を許容する関わりにつながると考えられた。これらの関わりにより、こどもの感性の発揮が促され、育むことにつながると考察された。また、本研究で検討した関わりは、感性を発揮しているこどもの姿を受け入れるといった保育者の受け身の関わりであると考えられた。このことから、今後の展望として、こどもの感性を引き出す保育者の働きかけを明らかにすることを述べた。

キーワード：感性、幼児教育、保育、保育者の関わり

1. はじめに

1.1 問題と目的

感性とは何か。永野・木谷（2023）は、幼児教育における感性を「単に外界の対象に気づくという受動的な働きではなく、受け取った対象を自身の経験や知識と照らし合わせ、情報の取捨選択を行うことで、対象に価値が生まれ、表現する方向性を探り、探究や工夫等をしながら対象に関わるという表出がなされるという能動的な働き」とした（図1参照）。

では、感性とはどのように育まれるのか。文部科学省（2017）が示した幼稚園教育要領解説では、さまざまなものから刺激を受け、気づくことや感じることを楽しむという体験を繰り返すことで感性は育まれるとしている。このことから、筆者は感性を発揮する体験を繰り返すことにより感性は育まれると捉えた。

では、感性を育む上で求められる保育者の関わりとはどのようなものであるのか。幼稚園教育要領解説では、「何よりも幼児を取り巻く環境を重視し、様々な刺激を与えながら、幼児の興味や関心を引き出すような魅力ある豊かな環境を構成していくことが大切である。」（文部科学省2018：225）と述べている。しかし、哲学者である桑子（2001）は、こどもを取り巻く環境を大人が構成することはこどもの体験を「コンセプト化」することであり、そのような体験を感性を発揮した体験として捉えて良いのかと疑問を呈している。この疑問に対し、桑子（2001）は、「コンセプト」からずれた姿が感性の発揮した姿であると述べている。その上で、大人が「ずれや逸脱を許容できる精神」（桑子2001:55）を持つことが、何よりも重要であるとしている。桑子（2001）は、こどもたちの体験を「コンセプト化」するような環境を構成したとしてもそのような体験をこどもに押し付けることはせず、こどもが好きなようにその環境を使っている姿を許容するという関わりが、「コンセプト」からのずれ、

すなわち、感性の発揮を促すとしている。

ただ、以上のように、桑子（2001）が述べた理論は、幼児教育・保育の実践を指して述べているものではない。したがって、本研究は、桑子（2001）が述べた理論を踏まえながら、幼児教育・保育の場面を描いたエピソードから、感性を育む保育者の関わりを検討することを目的とする。

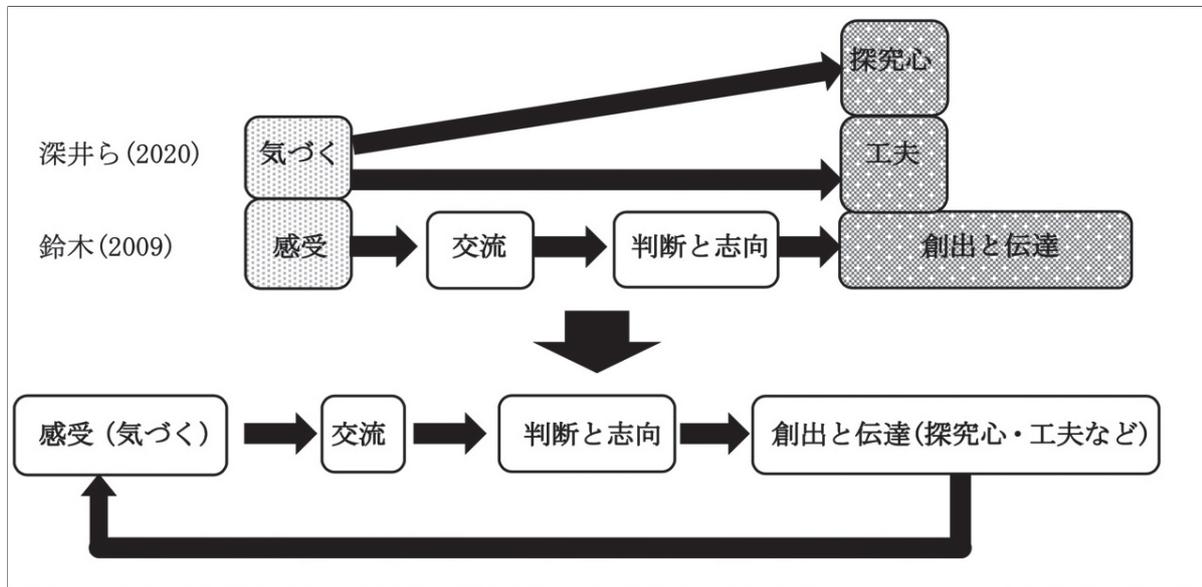


図1 幼児教育における「感性」の定義（永野・木谷 2023）

2. 方法

2.1 研究方法

本研究では、日々の幼児教育・保育の実践から、こどもが感性を発揮していると考えられるエピソードを選択し、考察する。そのために、筆者は、鯨岡（2007）による、エピソード記述という研究方法を用いる。永野・木谷（2023）による感性の定義では、表出に至るまで内的な動きがある。この動きを捉えるためには、間主観性が必要であると考え。間主観性とは、「『相手の意図が（私に）分かる』というような目に見えない」（鯨岡 2016：35）現象のことである。こどもが発揮している感性を読み取るということは、こどもの感性が表出されるまでの内的な動きを間主観的に分かるということであると考え。

さらに、こどもの感性の発揮を間主観的に捉えるためには、「接面」という概念が必要になる。鯨岡（2016）は、接面について「人と人が関わる中で、一方が相手に（あるいは双方が相手に）気持ちを向けたときに、双方のあいだに生まれる独特の雰囲気をもった場であると定義できる」（鯨岡 2016：85）と述べている。さらに、鯨岡（2016）は、「接面」により生じるのは、目には見える行動や言動に加え、目には見えない相手の心の動きや自分の心の動き、その場の雰囲気といったものであると述べている。「接面」により読み取られた現象は、エピソードで描かない限り、「接面」の外にいる人にはわからない。このことから、「接面」により読み取れたこどもの感性の発揮という間主観的な現象は、エピソードによって描かれる必要があるとしている。

以上のことから、本研究では、感性を育む保育者の関わりを、エピソード記述という研究方法を用いて研究する。

2.2 倫理的配慮

本研究に記載するエピソードにおいては、対象のこどもの保護者に対し、本研究の目的や方法について、書面と口頭で説明をし、同意を得ている。また、北海道文教大学研究倫理審査委員会からの承認を得ている（承認番号：05011）。

3. 結果

3.1 2つのエピソードの背景

筆者は、大学院に通いながら、認定こども園で勤務している。2年間パートを勤めたこども園を退職し、本年度から、新たなこども園で、臨時職員として勤務している。筆者は、現在勤務しているこども園の、保育理念に共感していることから、職員として一員になれた事に誇らしさを感じている。筆者は、普段、アイちゃんがいるクラスとは別のクラスで、保育補助としてクラスに関わっている。また、筆者は、預かり保育の担当でもある。筆者とアイちゃんは、別のクラスであったが、たまたま筆者がアイちゃんのクラスに保育補助で入る日があった。その時に多く関わったのがアイちゃんであった。また、アイちゃんは預かり保育を利用している。そのため、普段から、アイちゃんと、一緒に絵を描いたりキャッチボールをして遊んだりする。

エピソード1では、保育補助としてアイちゃんがいるクラスに入った際、筆者が、アイちゃんの活動に興味を持ち、近くで関わろうとしたエピソードである。エピソード2は、預かり保育の時間に、アイちゃんと一緒に遊ぶ事になった際のエピソードである。

3.2 エピソード1「かきごおりやさんごっこ」

【「かきごおりやさんごっこ」の背景】

クラス活動の時間、今日は担任と園児たちが話し合い、どのような活動をするのかを話し合った。私が補助として入った年長クラスのアイちゃんは朝から担任に「ドーナツやさんがしたい」と伝えていたため、担任の促しがあり、皆の前で「ドーナツ屋さんさんがしたい」という意見を出した。少し前に、隣の年長クラスのこどもたちがジュース屋さんを開き、それが大流行したため、園ではお店屋さんを開くことが園児たちのブームとなっていた。アイちゃんのみならず、他の園児もアイス屋さんやペットショップという意見を出した。他にも園庭で遊びたいという意見を出す園児もいた。アイちゃんは皆の意見を聞く中で「やっぱりかきごおりやさんがいい」と意見を変えた。話し合いの末、園庭で遊びたいという園児の意見も尊重し、園庭と隣接しているテラスで各々のお店の準備をし、昼食もテラスで食べることになった。以下は、アイちゃんが本日の活動として提案した「かきごおりやさんごっこ」のエピソードである。

【「かきごおりやさんごっこ」のエピソード】

他のこどもが自分の出したいお店の準備をする中、アイちゃんは仲のよい友達と「かきごおりやさんごっこ」の準備を始めた。「何味を用意しようかな」とアイちゃんは友達と話し合い、色画用紙をクシャクシャに丸め、それを廃材のカップに詰めることで、様々な味のかき氷を作っていた。私は、こども同士で意見を出し、準備をしている姿に対し、「うちの園らしい活動だな」と、今の園に勤めていることが誇らしく思えた。そのため、アイちゃんたちの姿を、見守る関わりをしていた。

アイちゃんたちが準備を進めていくと、もう1人の友達が、「私もかきごおりやさんやりたい」とアイちゃんたちの輪に入った。3人で、かき氷やお釣りに使うお金を作っていたが、他クラスが展開していた「ジュースやさん」にあった、看板やメニュー表などは作っていなかった。そこで、私は、「お店に必要なものって何かな」と3人に声を掛けてみた。私の声掛けに対し、アイちゃんは、「スプーンが必要だね」と応えた。私が、期待したのは看板やメニュー表といったものを作ることに気づく姿であった。そのため、スプーンを作り始めるアイちゃんの姿に、納得できなかった。釈然としない中ではあったが、私は、「お店に看板やメニューが必要じゃない?」と、具体的に声掛けすることはせず、見守る事にした。

3人は、「かきごおりやさん」の準備を進め、かき氷に必要なシロップやスプーンを作り始めた。これらを、ある程度作り終えた時、私は「お客さんにどれが何味が伝わるかな」と、再度、看板やメニュー表が必要であることに気づかせるような声掛けをした。しかし、アイちゃんは「そんなもの口で言えばいい」と私に言った。アイちゃんの言葉からは、「先生の提案は、私には必要ない」と言われたような気がした。そして、2度も期待を裏切られた私の心はズタズタであった。

結局、出来上がったのは、アイちゃん直筆の「あいてるよ」と書かれた紙が貼られた木製の屋台と、大量に並べられたかき氷の山であった。その後、3人は片付けを済まし、園庭に遊びにいった。「看板もメニュー表もない隠れた名店に果たしてお客さんは来てくれるのだろうか」と不安があった。また、「ジュースやさん」を開いていた他クラスのような、クオリティの高いお店にして欲しかったという、物足りなさを感じていた。しかし、同じクラスの男の子が、年少クラスに「昼食後お店を開くから来てね」と宣伝していたため、たくさんのこどもが昼食後かき氷やさんに集まることとなった。アイちゃんは、「いらっしやいませ!」と、年少クラスのこどもをかき氷やさんに呼び込み、「これがいちご味ね」と、私に言った通り、口で味を説明していた。お店を開き、元気一杯に、お客さんを相手するアイちゃんたちの楽しそうな姿に、私は、「こどもたちが楽しいと思えるならどんなお店の形であってもいいか」と、不本意ながらも受け入れた。

【「かきごおりやさんごっこ」の考察】

本エピソードでは、他クラスが、「ジュースやさん」を展開したことにより、自らも「かきごおりやさん」を展開したいというアイちゃんの姿があった。筆者は、自らが勤務する園の理念に共感し、自身も園に関わる一人であることを誇らしく感じていた。そのため、こどもたちで考え、工夫し、活動する姿に、立ち合う事ができたという事に、心を震わせた。このことから、筆者は、アイちゃんが展開する「かきごおりやさん」に対し、声掛け等はせず、アイちゃんの活動を尊重し、見守る事にした。

しかし、アイちゃんが「かきごおりやさん」の準備をしていく中で、筆者は、看板やメニューがない事が気になり、声を掛けてしまった。これは、「ジュースやさん」を展開していた他クラスの活動のクオリティと比較してしまった事が要因であるとうかがえる。アイちゃんが展開する「かきごおりやさん」に同じようなクオリティを筆者が期待しているのだ。ただ、アイちゃんは、保育者の期待とはすれ違い、スプーンを作り始めている。筆者は、この姿に釈然としない中ではあったが、具体的な声掛けは避けている。これは、アイちゃんの活動を尊重する気持ちがあるからこそ、筆者の意図を押し付けたくないという気持ちの表れであったと考える。この時の、筆者の気持ちは、「アイちゃんの活動を尊重したい」という気持ちと、「お店のクオリティを上げて欲しい」という気持ちが揺れ動い

てる事が考えられる。

また、筆者は、かき氷やシロップなどを、ある程度作り終えた時、再度、看板やメニューの存在に気づかせるような声掛けをしている。しかし、アイちゃんからすれば、メニューがなくても、「そんなもの口で言えばいい」のである。筆者は、アイちゃんに向けた自身の気持ちが否定されたと感じ、心を痛めている。

結局、アイちゃんの展開したお店は、筆者が期待したクオリティとは掛け離れたものであった。アイちゃんが準備した「かきごおりやさん」に対し、筆者は、「お店のクオリティ」という見目で判断し、不安や物足りなさを感じていた。看板やメニューがないお店ではあったが、アイちゃんは、「かきごおりやさんごっこ」を楽しんでいた。筆者が思う「お店のクオリティ」ではなかったが、アイちゃんが楽しむ姿を見て、アイちゃんの「かきごおりやさん」を、不本意ながらも、受け入れている。「お店のクオリティを上げて欲しい」という気持ちに傾かず、「アイちゃんの活動を尊重したい」という気持ちを持っていれば、このような想いは抱かなかっただろう。また、アイちゃんが「かきごおりやさん」を楽しむ姿を、十分に受け入れる事ができたであろう。

以上のことから、「こどもの活動を尊重する気持ち」を見失わない事が、本エピソードにおいて、保育者に求められる関わりである事が考えられる。筆者が、「お店のクオリティ」という見目で判断したことにより、アイちゃんの姿が見えなくなってしまった事が、本エピソードから考察できた。

3.3 エピソード2「おんせんごっこ」

【「おんせんごっこ」の背景】

預かり保育の時間、その日は晴れていたのでこどもたちはみんな園庭で自由に遊ぶことにした。私は、年長児のアイちゃんと一緒に遊びたいと誘われていたため、園庭で一緒に遊ぶことにした。以下のエピソードは、アイちゃんと園庭で一緒に遊んだ際のエピソードである。

【「おんせんごっこ」のエピソード】

アイちゃんに「何して遊ぶ？泥だんごでもつくる？」と聞いたところ「うん」と答えてくれた。私は、昨日、他のこどもと泥だんご作りをしたが、なかなかうまくできなかったのでピカピカの泥だんごを目指して今日も作る予定だった。アイちゃんと楽しく遊べて、私もピカピカの泥だんごができれば嬉しいなと思いながら砂場へ向かった。園には3つの砂場があるが、私とアイちゃんが向かった砂場は他とは違い泥の粘性が高く、水を吸収しづらいため、こどもたちはよく川や池を作って遊んでいた。その池の跡地なのか大きな穴が砂場に空いていた。アイちゃんはその穴に入り、腰掛けていた。その穴はアイちゃんが足を伸ばして座って腰あたりまであった。アイちゃんが穴に興味を示していたため、私が遊びたかった泥だんご作りを中止し、その穴に水を溜め、池を作ろうと思った。私がバケツに水を汲み、穴に流すと、アイちゃんは「もっと水をためよう」と言い、私とアイちゃんの2人で協力して水を貯めることにした。穴の半分ほど溜まったところで私は「温泉みたいだね、アイちゃん温泉だ」と声かけた。少し前に、「かきごおりやさんごっこ」を展開し楽しんでいたアイちゃんに、次は「おふろやさん」を作って楽しんでもらおうと思い私は声をかけた。しかし、アイちゃんはそのお風呂に入ってしまった。泥水にアイちゃんの下半身はすっかり浸ってしまった。私はその光景を見て着替えやシャワーのことで頭がいっぱいになり動揺した。ただ、アイちゃんが楽しそうに遊んでいる姿があっ

たので、私は止めるような声掛けはせず見守ることにした。その後、先生の配置の関係で、その場を離れることになったが、戻ってきた頃にはその温泉はアイちゃんごと埋め立てられていた。どうやらアイちゃんを泥で埋める遊びに発展していたらしい。お腹から下が完全に埋まっているアイちゃんの姿を見て、もう着替えなどつまらないことは考えていなかった。むしろ着替えやシャワーは私がとことん付き合うから、アイちゃんは思う存分遊びを楽しんで欲しいと願っていた。泥から出たアイちゃんの服や足は綺麗に泥だらけになっており、遊びに遊び尽くしたアイちゃんであった。

【「おんせんごっこ」の考察】

本エピソードでは、砂場に空いた大きな穴に入り、腰かけるアイちゃんの姿があった。この姿から、筆者は、アイちゃんが、大きな穴に興味があると読み取った。このことから、自らが遊びたいと考えていた泥団子作りを中止し、大きな穴に水を溜めて、池を作ろうとした。このような筆者の姿は、「一緒に遊びたい」と誘ってくれたアイちゃんに対し、「園庭での遊びを楽しんでほしい」という気持ちがあったためであると考え。そのため、アイちゃんの活動を尊重する関わりとして、アイちゃんが興味を示した、大きな穴を使って遊ぶことにしたのだろう。穴に水がある程度貯まった際、アイちゃんに対し、「温泉みたいだ」と声掛けしている。これは、以前、「かきごおりやさん」を展開し、楽しむ様子があったため、次は「おふろやさん」を展開し、楽しんで欲しいという願いを込めた声掛けである。園庭で、落ち着いて過ごせるよう、「おふろやさん」を展開し、楽しむ事を期待していたのだろう。

しかし、アイちゃんは、筆者が思う「おふろやさん」とは異なり、「自らがお風呂に入る」という姿を見せた。これに対し、筆者は、着替えやシャワーといった対応のことを考え、動揺している。これは、「園庭での遊びを楽しんでほしい」という願いと「着替えやシャワー対応」という職務を果たそうとする責任感が、筆者の中で渦巻いているゆえの動揺であると考え。ただ、泥水に浸かるアイちゃんが楽しそうに遊んでいる姿があったため、筆者は、「園庭での遊びを楽しんで欲しい」という願いに傾き、見守る事にしたと考えられる。

4. 考察

4.1 永野・木谷（2023）による「感性の定義」に基づくエピソードの考察

本研究では、感性を発揮していると考えられるエピソードとして、エピソード1「かきごおりやさん」と、エピソード2「おんせんごっこ」を記載した。エピソード内では、どのような場面において、感性を発揮しているか読み取ることができるのか。永野・木谷（2023）による「感性の定義」に基づき、検討する。

永野・木谷（2023）は、幼児教育・保育における感性とは、まず、環境内の対象「感受」することから始まるとした。そして、「感受」した対象を、自身の経験や知識と「交流」する。これにより、対象にどのような価値があるのか「判断」する。また、「交流」と「判断」の側面で生じた対象の価値を、どのように表現するか「志向」する。その結果、探究や工夫等をしながら対象の価値を「創出と伝達」する。このことから、永野・木谷（2023）は、幼児教育・保育における感性とは、単に情報を受け取る受動的な働きではなく、自らが対象に関わろうとする能動的な働きであるとした。

では、本研究に記載したエピソードでは、どのような場面において感性の発揮が読み取れるのか。

まず、エピソード1では、アイちゃんが、他クラスが展開する「ジュースやさん」を「感受」したことが、感性を發揮するきっかけとなったと考えられる。次に、アイちゃん自身の経験や知識と「交流」した結果、「おみせやさんごっこ」に対し、「楽しい」や「面白い」といった「価値判断」をしたことがうかがえる。また、アイちゃんが、「おみせやさんごっこ」に対して抱いた価値をどのように表現するのかを「志向」した結果、「自分もお店を開きたい」という「創出と伝達」に至ったのだろう。お店を開く準備をする場面では、アイちゃんが「お店」に対して感性を發揮している。「お店」を「感受」し、自身の経験や知識と「交流」した結果、「商品がたくさんある」、「お金が必要だ」という「価値判断」に至ったのではないか。これをどのように表現するのかを「志向」した結果、「商品やお金をたくさん作る」という「創出と伝達」をしていると考えられる。

次に、エピソード2では、アイちゃんが、「大きな穴」を感受したところから感性の發揮が始まっていると考えられる。自身の経験や知識と「交流」した結果、「お風呂みたい」という「価値判断」をしたことがうかがえる。これをどのように表現するかを「志向」した結果、「穴に入り腰かける」という表現に至ったことが考えられる。また、穴に水がある程度貯まった場面では、アイちゃんの感性は「お風呂は入るものだ」という「価値判断」をしたと考えられる。それゆえ、アイちゃん自らが、お風呂に見立てた泥水に入ったのだろう。

本研究で記載したエピソードでは、以上のように、アイちゃんの感性が發揮されていることが考察された。筆者は、幼稚園教育要領解説に基づき、感性を發揮する体験を繰り返すことにより、感性は育まれると捉えた。すなわち、エピソード内に見られるような体験を繰り返すことが、感性を育むことにつながると考える。

4.2 桑子（2001）による「コンセプト化」の考えに基づくエピソードの考察

本研究に記載したエピソードでは、アイちゃんの感性が發揮されていることが考察された。このことから、エピソード内において、アイちゃんが展開した活動のような体験を繰り返すことが、感性を育むことにつながると考えられた。

しかし、桑子（2001）は、大人の関わりが、こどもの体験を「コンセプト化」してしまい、感性の發揮を阻害することになると述べている。では、桑子（2001）の論説は、幼児教育・保育においても活用できるのか。

エピソード1において、筆者は、他クラスが展開した「ジュースやさん」のクオリティと比較し、看板やメニューがない事に気づかせるよう声を掛けている。これは、他クラスが展開した「ジュースやさん」が「おみせやさんごっこ」の「コンセプト」として、筆者に根付いていた事が考えられる。アイちゃんが展開する看板もメニューもない「かきごおりやさん」は、筆者に根付く「コンセプト」からずれたものであった。筆者は、「コンセプト」からのずれを許容する事ができずに、筆者が抱く「コンセプト」をアイちゃんに気づかせるよう、声を掛けてしまったのだと考えられる。このように、感性の目に見える側面でのみ評価し、こどもが感性を發揮している姿を見失うことは、保育者が抱く「コンセプト」で塗り替える関わりにつながるのでないだろうか。

また、エピソード2では、アイちゃん自らが、お風呂に見立てた泥水に入ってしまった光景を見て、筆者は、着替えやシャワーの対応のことを考え、動揺している。これは、泥だらけになって遊ぶアイちゃんを見て、「着替えやシャワーの対応」といった職務を全うする責任感が生じたことによる動揺であ

ると考えられる。結果的に、アイちゃんが楽しそうに遊ぶ姿を見て、「園庭での遊びを楽しんで欲しい」という願いに傾くこととなったが、職務を全うする責任感に傾いていれば、「そんなことしたら汚れるでしょう」というような声掛けをしまい、アイちゃんの感性の発揮を止めるような関わりをしていただろう。このことから、職務を全うする責任感も、時には、感性の発揮を妨げてしまう「コンセプト」として考えられる。

以上のことから、桑子（2001）が述べた「コンセプト化」という考えは、幼児教育・保育の実践においても、こどもの感性の発揮を阻害してしまうことが考えられる。エピソード2では、「着替えやシャワー対応」という保育をする上での職務を全うする責任感も、こどもの感性の発揮を阻害することに繋がるのが考えられた。そのため、職務を全うする責任感に囚われ過ぎず、保育者がこどもの姿に合わせ、臨機応変に対応することが、こどもの感性の発揮へと繋がるのではないかと。

5. 結論 — 2つのエピソードを踏まえた感性を育む保育者の関わり方の考察 —

まず、永野・木谷（2023）の理論と照らし合わせ、記載したエピソードにおいて、感性がどのように発揮されているのかを検討した。記載したエピソードでは、アイちゃんの感性が、活動や自由遊びを通して、発揮されていることが読み取れた。しかし、エピソード内における筆者の関わりは、桑子（2001）が述べたように、こどもの体験を「コンセプト化」するような関わりであると考えられた。また、幼児教育・保育の実践においては、環境に含まれる固定概念のみならず、職務を全うする責任感も、時には、「コンセプト」となり、こどもの感性の発揮を妨げてしまう恐れがあることが考えられた。

では、以上のことを踏まえ、感性を育む保育者の関わりとは、どのような関わりであるのか。

まず、エピソード1において、筆者は、「コンセプト」からのずれを許容することができず、アイちゃんの活動を尊重する気持ちを見失い、筆者が抱く「コンセプト」に気づかせるような声掛けをしている。これは、筆者が、「お店のクオリティ」という目に見える側面でのみ評価していたゆえの関わりである。このような関わりは、アイちゃんが感性を発揮した姿を見失い、保育者が抱く「コンセプト」で塗り替えるような関わりであると考えられた。すなわち、感性を育む保育者の関わりとは、桑子（2001）が述べたように、保育者が抱く「コンセプト」からずれるこどもの姿を許容する関わりであると考えられる。

また、エピソード2では、筆者は、アイちゃんが、砂場にあった大きな穴に対し、興味を示していることが読み取れていた。このことから、筆者が遊びたいと考えていた「泥団子作り」を中止し、アイちゃんと穴に水を貯める遊びを展開した。また、穴に水がある程度貯まった場面では、アイちゃん自らが、お風呂に見立てた泥水に入ってしまった。筆者は、泥水に浸かるアイちゃんの姿を見て、着替えやシャワーの対応のことを考え動揺している。ただ、アイちゃん自らが泥水に浸かることで、「おんせんごっこ」を楽しんでいる様子を捉えられていた。このことから、「着替えやシャワー対応」といった職務を全うする上での責任感より、アイちゃんが、「おんせんごっこ」を楽しむ姿を優先し、関わる事ができた。このように、エピソード2を踏まえると、こどもが何に興味を示し、何を楽しんでいるのかを捉えることが、「コンセプト」からずれるこどもの姿を許容する関わりにつながると考える。

以上のことから、感性を育む保育者の関わりとは、まず、こどもが何に興味を示し、何を楽しんでいるのかを捉えることである。このような関わりにより、保育者が抱く「コンセプト」からずれるこどもの姿を許容する関わりへと繋がっていく。これらの関わりにより、こどもの感性の発揮が促され、育むことへつながるのである。

本研究では、以上のような関わりを、感性を育む保育者の関わりとして検討した。本研究で検討した関わりは、感性を発揮しているこどもの姿を受け入れるといった、保育者の受け身の関わりである。では、こどもの感性を引き出すといった保育者の働きかけとは何か。今後は、このような関わりを、筆者自身の保育経験の蓄積と共に検討したいと考える。

文献

深井尚子・横山芙由美，2020，「教養必修科目感性と幼児教育の関連についての考察」『北海道教育大学紀要』71: 327-337.

鯨岡峻，2016，「関係の中で人は生きる」，京都：ミネルヴァ書房.

鯨岡峻・鯨岡和子，2007，「保育のためのエピソード記述入門」，京都，ミネルヴァ書房.

桑子敏雄，2001，「感性の哲学」，東京：日本放送出版協会.

文部科学省，2018，『幼稚園教育要領解説』東京，株式会社フレーベル館.

文部科学省，2017，『幼稚園教育要領』東京，株式会社東山書房.

永野颯一郎・木谷岐子，2023，「幼児教育における感性の定義の検討」『北海道文教大学論集』24: 21-31.

鈴木裕子，2009，「幼児の感性を具体化する試み—幼児期の感性尺度の開発を手がかりとして」，『保育学研究』47: 28-38.

Involvement of Childcare Workers in Fostering Sensitivity

—A study from childcare practice using Episode Descriptions—

NAGANO Soichiro and KIYA Michiko

Abstract: The purpose of this study was to examine the involvement of childcare workers in fostering sensitivity. To clarify this, we used a research method called “episodic description” by Kujiraoka (2017). As a result of the study, it was determined that the role of childcare workers in fostering sensitivity is to first understand what children are interested in and what they enjoy doing. It was thought that this would lead to relationships that tolerate children's behavior that deviates from the “concept” held by childcare workers. It was thought that these interactions would encourage children to express their sensibilities and lead to their development. In addition, the relationship examined in this study was considered to be a passive involvement of childcare workers, such as accepting children who are demonstrating their sensibilities. As a result of these findings, it was concluded that, as a future outlook, it is important to provide care that brings out children's sensibilities. The aim was to clarify the efforts of those involved.

Keywords: sensitivity, early childhood education, childcare, involvement of childcare workers